



江戸名所圖會

十





武蔵國總社六所明神社

府中驛路の左側あり延喜式内大

麻止乃豆乃天神社是なり後世に至る同く式内小

合せ祭る故小今両社一社の称あり神主ハ猿渡氏其餘社司

社僧等奉記す

本社祭神

大己貴命

相殿

素盞鳴尊

伊弉册尊

瓊々杵尊

大宮女大神

布留太神

以上六神これと俗に

天下春命

瀬織津比咩命

稻倉魂大神

以上三神これと客来

まゝ九神合せて共六所宮と称す此三神のうへ一宮と小野神社との条下は詳なり

延喜式神名記曰武蔵國多磨郡八座

武蔵國麻止乃豆乃天神多磨郡云云

大蔵國麻止乃豆乃天神多磨郡云云

所祭之大己貴命天多磨郡云云

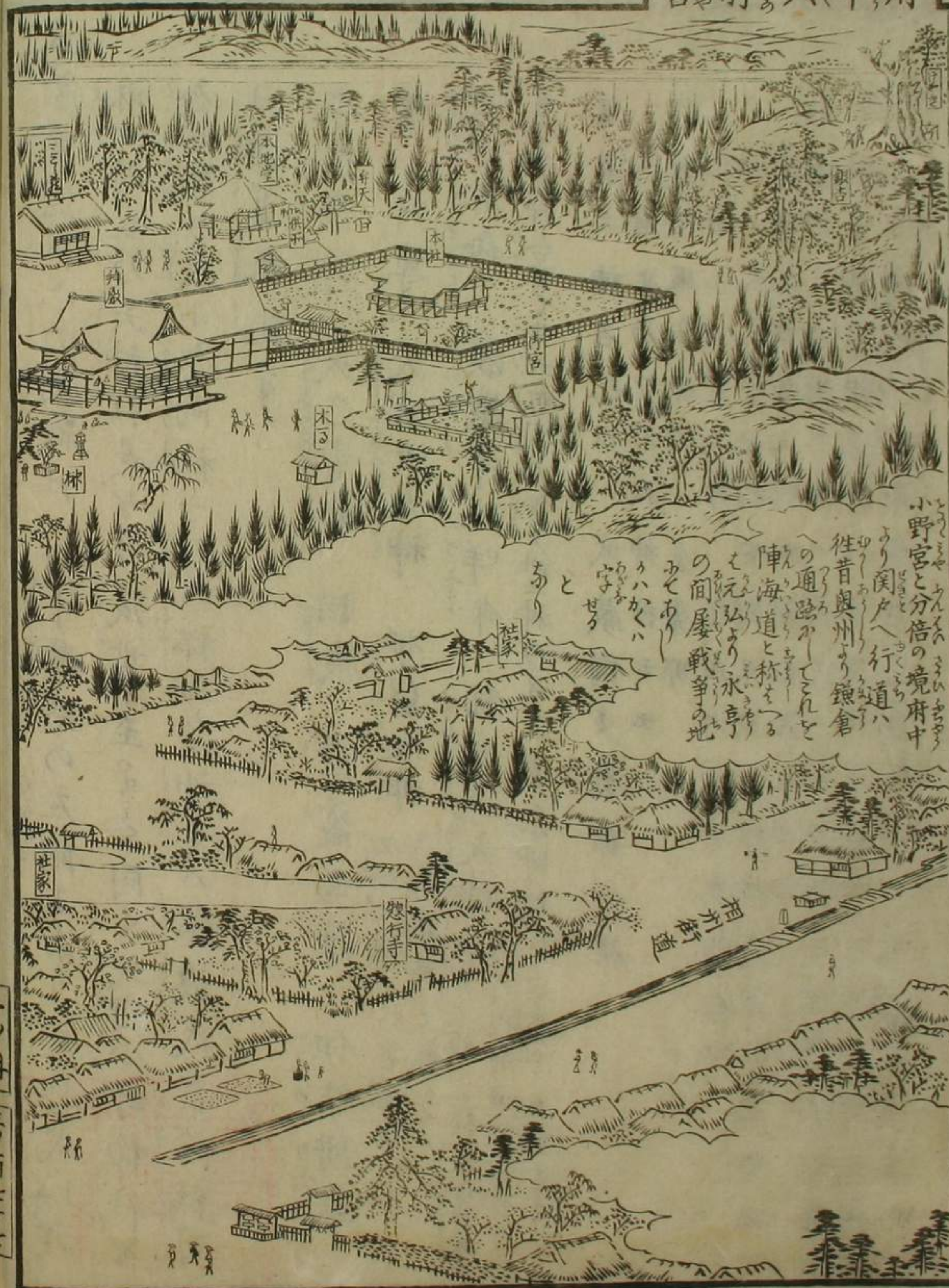
鑑曰新己貴命天多磨郡云云

伊豆産氣武治兼六八年十月一日酉及晩御臺所有

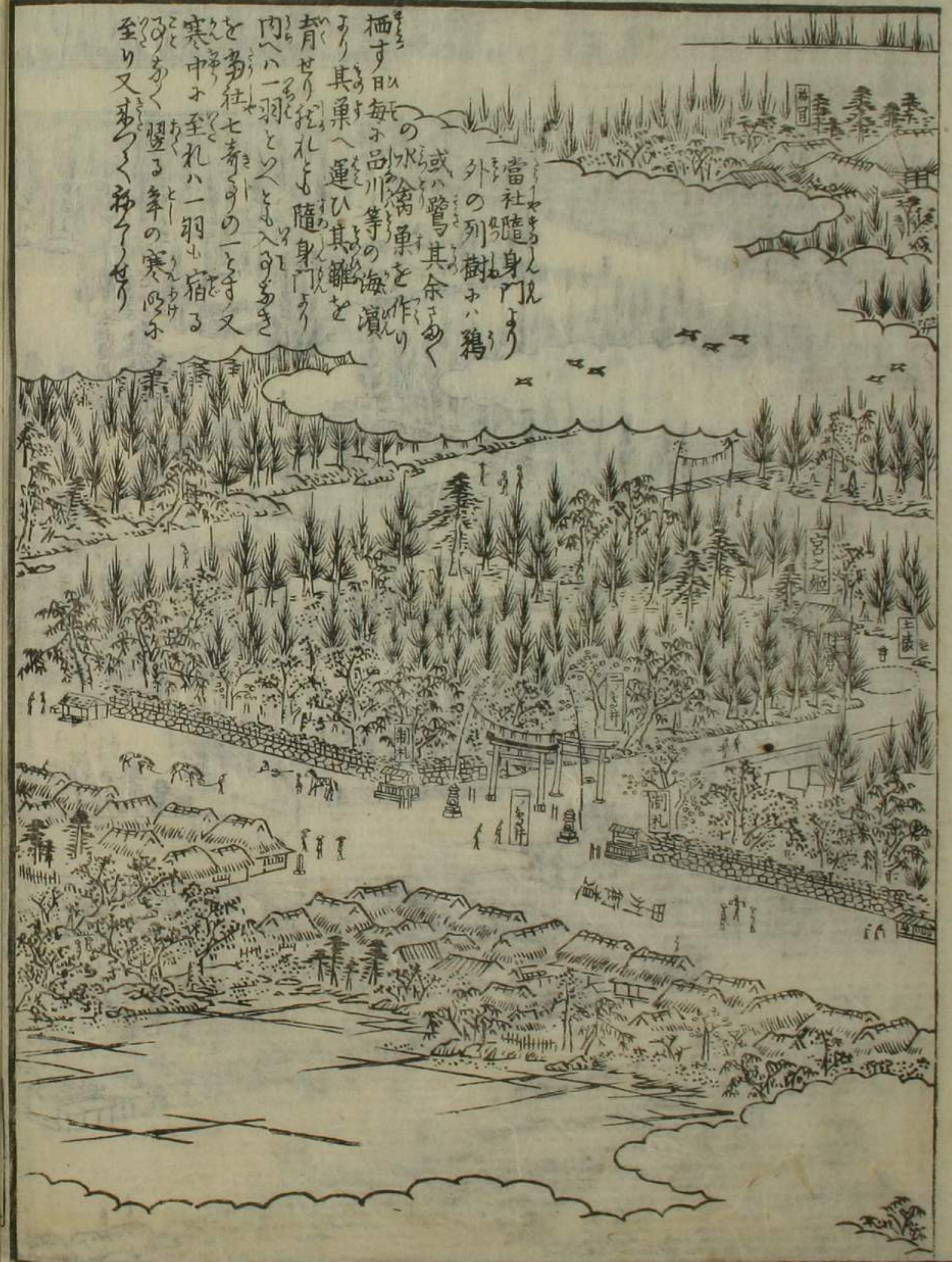
葛西三郎云云推現并近國宮社武蔵六所宮



府中六所宮



小野宮と分倍の境府中
 あり関ヶ原行通ハ
 往青奥州の銀倉
 陣海道と称する
 ところより永享
 の間屢戦争の地
 あり
 字ハカハ
 あり



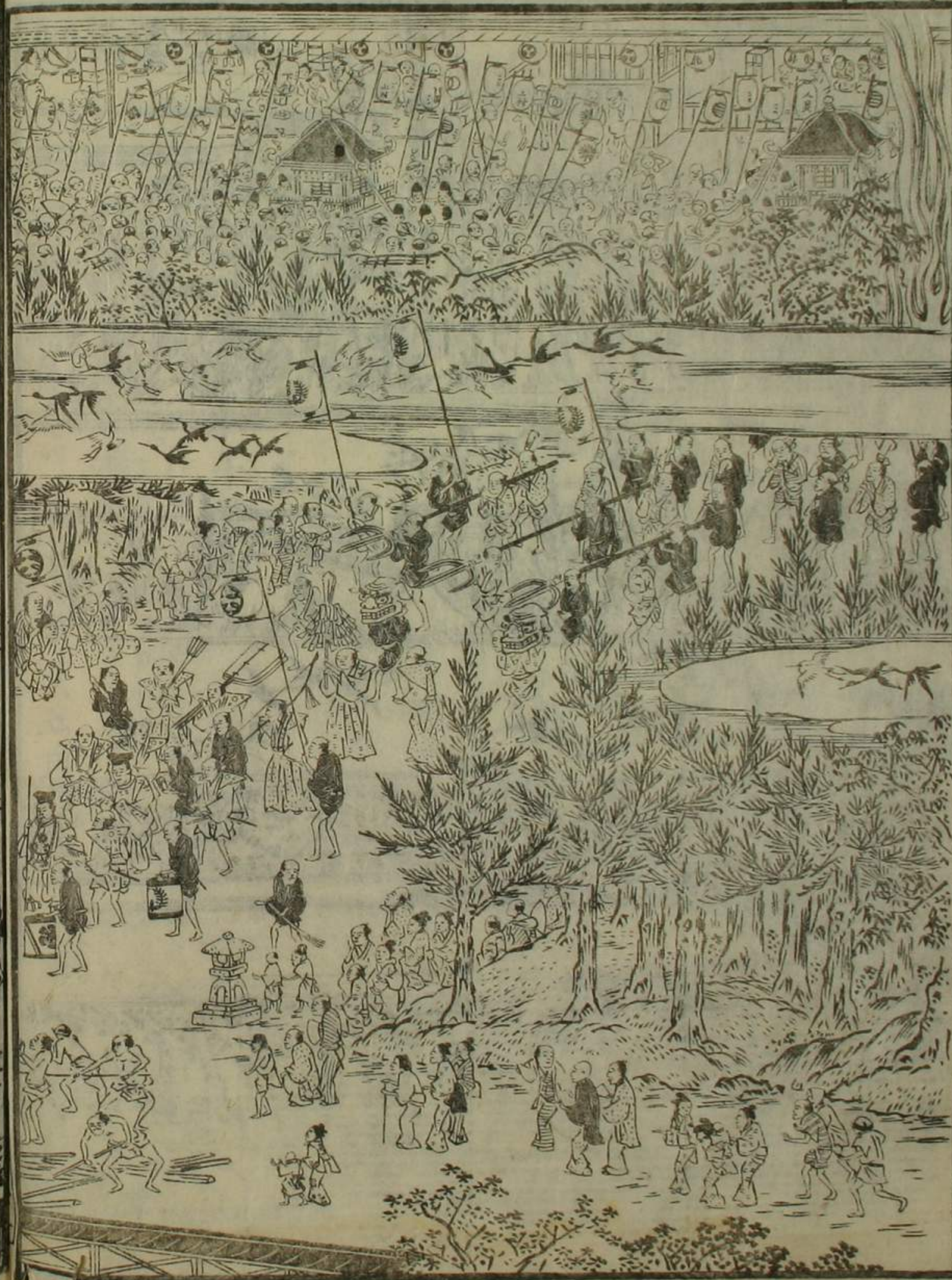
當社隨身門より
 外の列樹ハ鶴
 或ハ鷺其餘ハ
 栖す毎ハ品川等の海濱
 其巢へ運ひ其雛を
 育せり此れも隨身門より
 内ハ二羽と入るも又
 寒中ハ至れハ一羽ハ宿る
 至り又あつておろせり

同書曰 寛喜四年二月二十四日武蔵國六所宮拜

本地堂 本社の左あり中説ハ釋迦如来左右正觀音と地持菩薩と安置を
 大般若經持讀此堂ハ
 神輿庫 同ハ並あり神輿八基と収む内二神
 阿彌陀如来鏡像 同左ハ並入高七尺七寸の座像なり上ハ假名此雨
 又同ハ藤原氏と二所より同ハ文字を鐫上ハ假名此雨
 扶父庄司重忠愛媛の喜提の爲ハ造立せしものなり
 建長五年ハ元久二年より四十八年を歴る後の年号ハ
 人の説ハ此銅像ハ當國の國分寺ハ安置のものと云ふ
 此像ハ小松置よりよりこ小安置まともよりそ文左のめと

大勸進念阿彌陀佛明蓮大士藤原助近
 右志者過去二親并行嚴□新發意乃至
 法界衆生平等利益奉鑄一丈二尺佛身
 也
 建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日

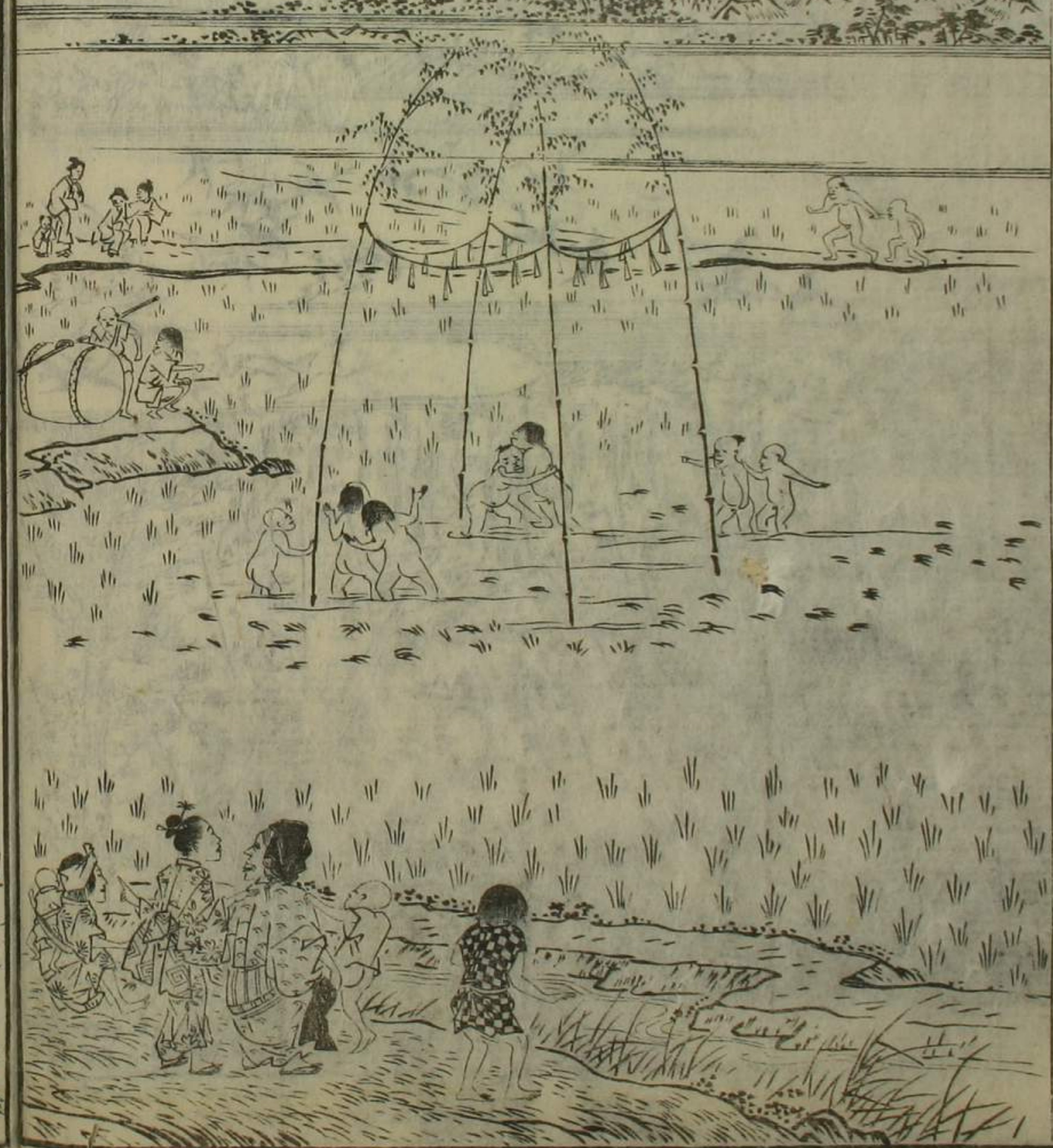
護摩堂 同ハ並あり不動尊の像と御供所 本社の前
 東照大権現宮 本社の右ハ安座を元和注連樹 本社の後ハ蒼林の中ハあり樟の
 四年戊午序創建とのハ





六所宮
田植

五月六日ハ序田植
の神吏武蔵
國の人民早苗を
獲来り神田の
身を挿り神童
白鷺の形の造り
物蓋鉾をさ
けてせんとし乃
傘と唄ひ舞ハ又
さそりのハこれ
と唄ひて今植鉾



由の中より出て
早苗を踏み花ひら
きまじく踊るが
有るも似せひらの
中ふあまをうね
のふふとてを起
立き葉未ふあま
あんとてうさう



出現神託ありあり祠を徑營しと里人崇敬しと
大正止乃豆乃
天神是乃乃
延喜式大藤止乃豆と風土記大藤止乃知と豆ハ通説なり又大藤後
藤止と以て於藤止と一或ハ布止藤止多藤止と云ふ
成務天皇五年乙亥兄多毛比命と云ふ此地小國造と云ふ
天穗日命の孫出雲臣祖谷二井
宇迦諸忍之神夜命十世の孫
又大巳貴命ハ此地出現の靈神あれハ是を崇とて祖神なるを以
素盞鳴尊を合祭し
兄多毛比命ハ出雲の臣の藤止と云ふ以ての藤止と云ふ當社
祭神の内藤止素盞鳴尊と崇とて祖神なるを以て
相殿小伊弉冊尊瓊々杵大宮女命布留大神等の四神を配
祀し新小此地小宮祠を徑營ありと圭田を附しと以て國社と
此と稱しと六所宮大藤止乃知天神と云又天下春命一宮の祭神あり
瀬織津比咩小野神社の祭神なり
倉稻魂大神
相殿の神以上三
神と六所宮の相殿小座座なりと客來三所と稱し是と
祭る小國社の禮を以す爾來大藤止乃知天神小野神社二社合
祀の社とありとあり
安閑天皇乙卯年小至りてハ春冬

二時の祭祀を行つ由旧史あり然小星霜を歴て康平
五年小至り源賴義義家兩公奥州安倍貞任宗任一族征伐
發向の時當社小詣り軍の勝利を祈願ありと夷賊平治
凱歌の時報賽と云ふ一華表の内左右兩辺小槻教株を種
りて以て成功を謝しと云ふ
其列樹今
治承四年右大將賴朝公當社
詣りて請禱一
大は戰勝の功ありと文治年間宮社を再興し又
壽永年間繼嗣を求め賴家公を偲く葛西三郎清重哉
しく神器を獻せしむ
寛喜四年中武藏左衛門尉資賴を命を
其後とて當社破壊の修理を加へり
所の祭祀今小連綿として廢せしむ
其後足利家小至り迄世に
將軍家相繼て崇敬衰へす就中河入國小建む
御當家あり
信ありと社領五百石を附し御祈禱の事を命せし閑原
大坂の兩役中當社の神主猿渡左衛門佐盛道をしと御勝
利の御祈禱を修せしと御感狀御直書を給ふと後二代

將軍家より又御書判の御直書を給ふ殊に御在國の
總社々々を以て慶長年間石見守大久保氏某を以て神
殿を新中一國家の紀典に列せしむ且命を下し馬市此
法則を定給ふ正保三年府中本町より火出當社神
領の地に至る迄皆悉く焼亡を依て寛文七年丁未大和守世
廣之侯とて造營使とあり宮社御再建あり
寛永元年社主の社記云神主藤渡三河守藤原盛正天正年間北条陸奥守
氏照の爲に王子の城を築く此城没落の時盛道とて戦死せし又此城火の災ふ
かり當社悉く灰燼せり故に頃世に將軍家の澄状或は秘蔵の神宝等
六所宮御旅所 六所明神より一丁半を西の方府中番場宿の
中程相模街道への岐道札の辻の傍より毎歲五月五日大祭に
辰夜六所宮の神輿をあるに其式八前の条下
詳なり

御田 六所の宮の後の小徑を過る百歩をあり豁然と稲
田なり東ハ悠遠や眺望分明なる南ハ多磨川の流を隔
て長岡の上短松の立もをる世所謂向ふ岡是あり此
地北ハ府中の驛舎より六所の林叢鬱然と
六所宮年中行事の
下詳なり

本覚山妙光院 真如寺と号し府中本町の南の小路にあり新義の真
言宗より花浴仁和寺の御門跡に属せ 清和天皇の御宇
貞觀紀元の年真如法親王の御願より慈夜僧正創
建あり佛刹より行基大士彫造の地藏菩薩壇をなすと
長五寸 若干の田園を附せ然る當寺度々の兵燹に罹り大
荒廢なりとて永享十一年己未法印宥源 長祿三年己卯
再建し當寺中興の閑山とあり 天正十九年辛卯御當家本堂
家帯の額真如寺の三大字ハ勝仙院僧正日光の筆同一向拜
の掲る本覚山の額ハ南山の沙門兼鎮の書裏門本覚山の額ハ

明光院
安養寺



天荷の筆書院無為心の額ハ佐々木玄龍の書なりと観音堂ハ
門の入口左の山北上にあらず大悲殿の額ハ僧禪大僧正覺眼筆と云
本尊十一面觀音の像ハ身長二尺五寸わりと聖德太子の作といふ
當寺什宝は北条氏照の書簡二通を藏せ其餘は小鷲の畫
幅ハ御筆の物なり牡丹唐草ハ扇を縫物と云五條の袈裟
と共に御當家より拾ふと云なりといふ

古磬一枚 華物なりて銅色變遷し臺ハ

敬光山安養寺 妙光院の南の小路を隔て同一並びあり 此地の小路

崎と天台宗上州世良田の長樂寺ハ属を本寺阿弥陀如来
座像一尺六寸なり作者詳かり永仁年間海上人中興

閑山より近き年地魚の災ハ罹りて旧記を亡きなり

武蔵國造兄武日命殿館跡 妙光院の前北岡を云上古國造居館

の地なり 御入國の後此跡ハ省耕の御殿と建せられしなり

大樹屢々うへせられしなり 正保三年丙戌十月十二日府中

本町より出火して此御殿焼亡せり 其後ハ御再興あり享保

年間里民の乞ふ任せ陸田となり 下さきとあり故ハ土人ハ御殿地

と称せり此所の眺望を勝と云

按ハ國造ハ神武天皇都を大倭國橿原に定め天皇の位ハ自らあし時葛城

國の造を定め其餘は皆ハ國造を賜ひ又縣主を定めありこの

代ハ小任せしなり和銅の比を總任の國造百四十四員あり皇朝上世ハ百四十

四箇國より國造一人ありて神祇祭祀を掌りて民事を治

仁德帝の御宇ハ遠江國司又崇峻帝の御宇ハ河内國司とあり聖德太子の

憲法ハ國司國造の二ありて天武紀ハ諸國司國造郡司ハ百姓等とあり又國

司を置けハ國司ハ國造より位高く權重き故ハ國司國造と次第して稱せられしなり

是政村 府中の南多磨川の北の岸頭あり此地の里正ハ井田氏の人あり

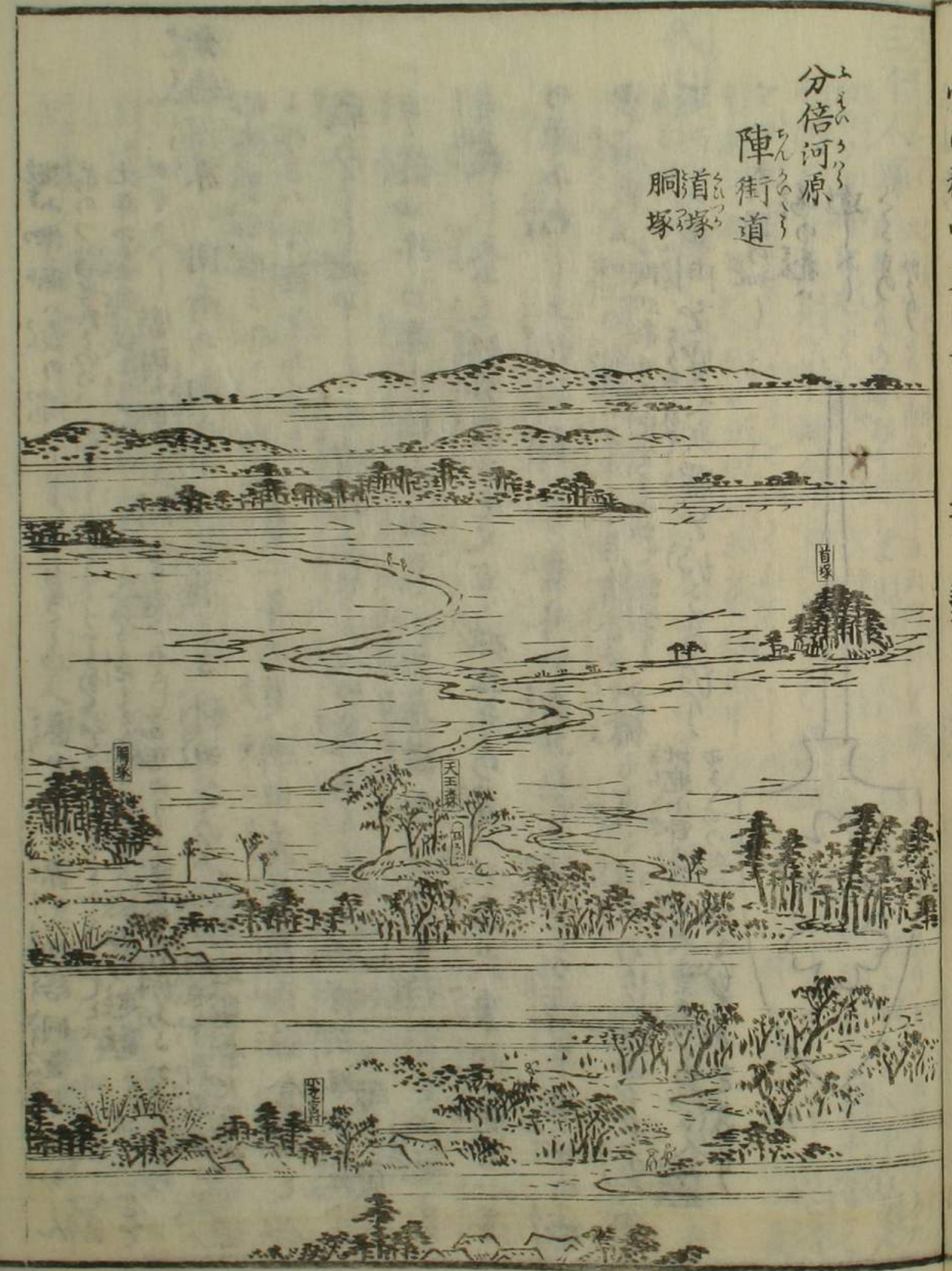
其家系を按ふ祖先ハ畠山庄司重忠の四男井田四郎重政の末葉なり

小田原北条家の臣井田長津守是政ハ子孫なりと云天正十八年小田原

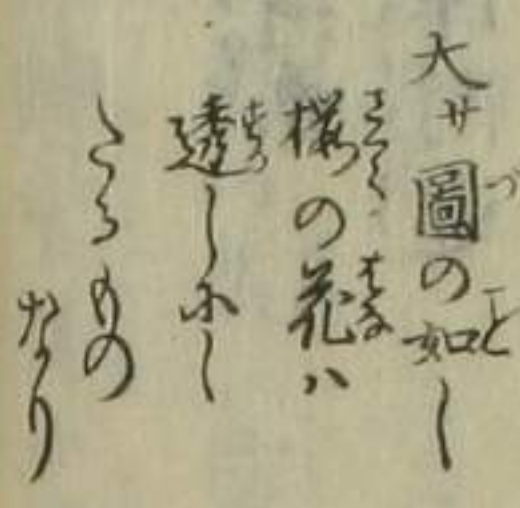
没落の頃ハ王子の城敗れしより後此地ハ住を依て是政村の名あり

悲願山善明寺 圓養院と号し府中本町より關戸へ行道の右側
 あり相模街道より天台律院より常明院より屬本寺より阿彌
 陀如来の像を安す坐像一丈六尺あり胎中慈覺大士彫造の開創年
 久く中古寺院荒廢して記録を失せ然る近來編無為解脱居士
 俗稱依田伊織當寺と再興あり證海上人と申奥関山と田園
 等を寄附せり故に居士の肖像あり東帶の像なり側より内陣の額に
 毗尼藏とあり准后公遵法親王の御所なり解脱居士の墓を
 堂後よりと彼岸山文庫ハ本堂の右より庫中収蔵せしむ此
 書籍ハ解脱居士の著書なりとて二百二十二箱あり
 津保宮 同所四丁より西南の方下河原農民の地より當社ハ因造
 の靈社なりといふ今幾く茅祠を存するものとされ毎歲五月五日六所
 宮大祭の爲ハ當社より六所宮へ奉幣使を立ち旧式より則六所
 宮の神官馬小衆より是と勤む

分倍河原
 陣街道
 洞塚



紀傳等分傳は作る分傳
 正慶二年の夏新田義貞朝臣鎌倉界と合
 戦ありし地なり其時討死せし人の墓あり
 今猶此所の田間と稱へる
 亨徳四年の春も徳倉成氏上杉房顕なりしひふ持朝と此地を
 争戦し大に上杉勢敗北も又亨祿三年の夏ハ北条氏康向う岡の小澤
 の原ありし上杉朝興ハ多磨川を前ありし陣とる西軍府中の驛
 ありし相戦ふ以上合戦ハ大平記に徳倉大寺
 此餘も度々血戦ありし地なりと云ふ今も
 此地小野宮内茂重喬と云ふ人此地
 遇此所の田間を穿て兵器をたづめり



按は慶長年間官舟より六所宮へ寄たまひし書の中六所宮川傍ありと
 注されしハ多麻川の水流被條より分れて野宮田とせしあり川
 ありと慶長の後樋を掘りて川と埋め野宮田とせしあり川
 地勢とありし依再按今小野宮田とせしと土人向田と
 字一同一南を中河原と号するは川を隔てし後とす

陣街道 小野宮と分倍との間の耕田の地中より府中本町より関戸へ
行道の名とに昔奥羽等の國より鎌倉或は大磯杯への往還此
道より鎌倉より北國東國へ軍勢を向らる頃の通路なり

あかしく称せしもの

小野宮村陣街道を隔て分倍より良小當り地をあるの宿の中

僅は家数三十軒あるもの小野八上古郡村定らるる時より号あり

小野縣と称せしもの是なり今八府中の舊名とあり和名類聚

抄小多磨郡小野乎乃とあり此小野宮の耕田をさへ元龜天の頃

北田間の塚ハ中占の甲州街道府中より日野へ往還の一里塚中今も野徑

小野神社舊址小野宮村陣街道の右あり今幾小叢祠を存するの

武藏國風土記曰多磨郡小川郷

延喜式天皇三年甲午始行祭禮有神戸巫戸等云云

三代小野實録光孝天皇紀癸酉授武藏國從五位上小

野元慶八年七月十五日上云云

小野神社



史ありと除き多し一々名ありと実なく澄とてさるなりけり
観音堂 表門をへて正面あり観音ハ木佛立像七尺あり左右
當寺ハ足利家の再興より永徳元年鎌倉左兵衛督氏満小山
義政退治とて發向あり頃も當寺ハ陣座を儲けらる又應永
六年ハ左兵衛督滿兼周防の大内助義弘ヲ京都ハ於て逆心を
起せ一時同十月廿一日京都のふ合とて當寺ハ動座なりぬ
同三十年癸卯春も又常陸國の住人小栗孫五郎平滿重ヲ謀反
あり鎌倉あり持氏公結城へ發向同年八月小栗落城の後同十六日
當寺ハ歸座同三十一年十月廿三日當寺炎上あり一ハ同十月
十四日持氏公鎌倉へ還御あり一ハ當寺ハ鎌倉大草紙にええ
たり 當寺ハ什室の中は往古多氏公陣中にて用ひられと云古き銅羅一口あり
石上山弥勒寺 般若院と号し高安寺より六町あり西の方同一
街道の右側あり真言宗とて府中の妙光院ハ属申開創此
始久し今あらとて永正二年乙丑權大僧都法印良長
中興也本寺大日如来ハ一尺斗の座像とて作者未詳當寺
津戸勘解由左衛門尉菅原規繼墓あり

墓碑如圖

津戸勘解由左衛門尉
冠死去
延文五年七月十日
沙弥道繼
門尉菅原規繼

谷保天神社 同街道西の方谷保村道より左側あり
別當ハ安樂寺と号し祭礼ハ毎歲二月と八月の廿五日又三月十五日
ハ岡扉あり十一月三日ハ當社往古天神島と稱する地より今此
地ハ遷座なり縁あり此日ハ小菜供を献備せりとて
本社祭神天満大自在天神一座神祇ハ菅家弟三嗣菅原道武

谷保天神社
社内、常磐の
精水あり



清水立場

甲州街道の立場
 清水の湧き出る
 清水の村のありと
 云此地は酒舗あり
 て店前清泉湧
 流も夏は涼
 を湛して行々
 應せり故此地
 往来の人々
 憩ひて暑
 を避るハ
 ナリ



朝臣の手刺なり

額 天満宮 後宇多天皇勅世尊寺經朝卿筆

額の裏に左のやまの二十四字を刻せり又外は同額卿の写し一枚あり水戸黄門
 光國卿の筆なりと納まりしとて裏書に元禄三年庚午眉毛軒河塾門
 徑朝卿の筆せり額の背面に曰

建治元年己亥六月廿六日乙丑書之

正三位藤原朝臣經朝

常盤清水

裏門出口道の端に小池あり中島あり弁財天を安置し清泉湧出
 紫の僧某當社へ詣り頃和歌を詠みしなり常盤の清水と称せり延宝年間
 本地堂 觀音の像ハ慈覺大師の作と云 道武朝臣靈社あり土人三郎

社傳云昌泰四年菅公筑前の太宰府へ左遷の時卿三男菅原

道武朝臣も又此地に流されしとせし三年の星霜を経ぬとて悲歎の

延喜三年二月二十五日父君菅公筑紫に亡ぬとて悲歎の

あり配所の徒然小父君の御像を手親模刻しあひ旦暮在り

如く事へ孝道の誠を尽さるひと後一社奉し奉る
昔大社を僧房も多かりしとあり櫻本坊邑盛坊尊住坊梅本
坊松本坊庵の坊以上六坊中古遠も御残ありあり夫へ廢れて
今庵の跡と号する一字天曆に至りてハ村上帝伯犬一雙を寄附
の存せり是古の遺の坊あり又大般若經四卷を収む源義經朝臣此
奉納なりと云伊勢三郎龜井六郎及ひ弁慶等の
四人書寫せし経卷なりと云

菅原道武朝臣舊館地 同所二丁許南あり空堀城門の跡と覺
す所もええく四方二町あり此封境なり土人三郎殿屋敷跡と称
す相傳ふ三郎道武此地に住し當地の縣主上平太貞盛の女を娶
一子を得り其子を菅原道英と号夫より六世の孫を津戸三郎
為守と号する津戸為守の御安或云此地ハ貞盛舊館の地なり
道武主貞盛の御女と云

假家坂 同所安樂寺の門前百歩計街道の西の方へ向ひく上坂を
云建治二年奉幣使此谷保天神の宮へ下向し多ひ一頃假小旅

館を假け一田跡なる故に此号ありと云

梅香山安樂寺 松壽西院と号す天神社より一町半あり西北の方

街道より右側ふりて天台宗あり東嶽山は属せり當寺を

天満宮の別當寺なり天曆年間法圓大僧正開創せりと云

中興ハ津戸三郎為守願なり本多阿弥陀如来ハ法然上人の

作なり座像一尺五寸計あり佛軀の中は為守注する所の血文を

収むと云其餘什宝は為守の太刀一振同画像一幅同甲冑の

中ハ簞と云藥師佛あり傳教大師の作と云像材ハ沈香小

く十二神將の像追悉く高サ一寸斗比厨子の内は造り簞られ

津戸三郎為守の墓ハ王子の市中觀他山大善寺との十八檀林

津戸三郎為守の墓ハ王子の市中觀他山大善寺との十八檀林

順善と号する者造立せし石碑なり又為守の住し地ハ同所多

為守の法名を頼朝の御子と云菅原孝標常陸守下國の時武藏

國の徳進補使扶父權守平重盛の嫡子と云生年を津戸次郎為守

其三男為守なり為守生年十八歳なり治承四年八月石橋山の合戦

馳参し頼朝公の旗下は属し度々軍忠を顯し名をあけしといひ

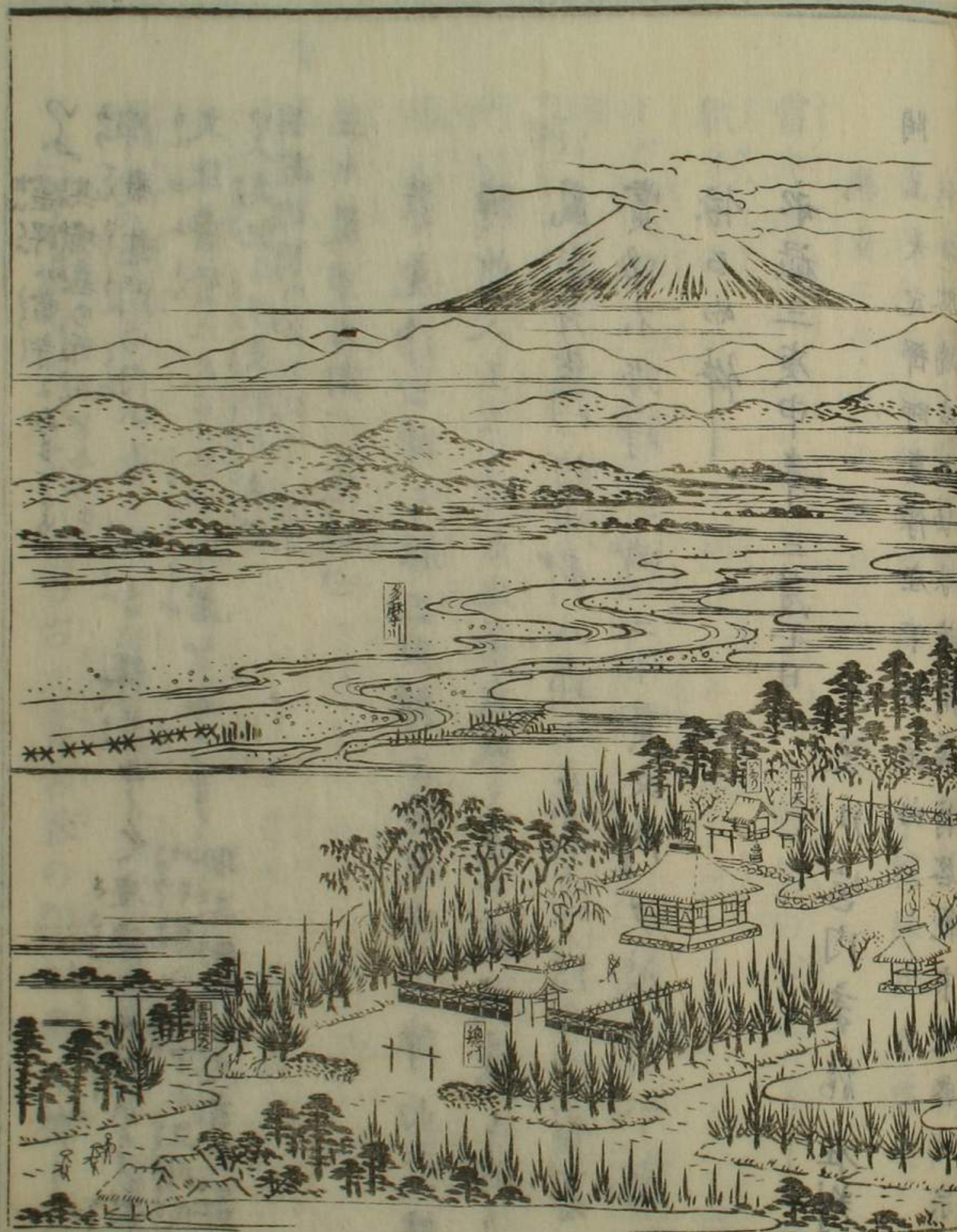
其三男為守なり為守生年十八歳なり治承四年八月石橋山の合戦

馳参し頼朝公の旗下は属し度々軍忠を顯し名をあけしといひ

其三男為守なり為守生年十八歳なり治承四年八月石橋山の合戦

日野津

十六阿羅漢十大弟子等の木像を安んず共々作者詳なり中
與大檀那ハ立川宮内大輔と稱す法名ハ宝山道貴大禪定門と



靈牌ハ當寺にあり
其墳墓の所在をあるも
佛殿惣門の内小あり本より八釋より座像三尺計あり服七
文殊普賢二尺斗共小作者をあるす
其記は平重能平義親
平高親等の名を記せり
五十嵐市左衛門感状曰

景虎涉出陣三初三田彈正忠政定先陣而大幡
陣所八王子城至北条氏照及一戰沒落所五十
嵐市左衛門竹田新八郎ト云武士ヲ討死二番著到
賞功不跡時芝崎三十貫文所ヲ被仰下者也
依る也

永祿三庚申年三月七日

立川宮内重能在判

開山大定禪師真像座下之記曰
宗義啓瑞宗順啓勝宗範啓壽壽性了宗宗快翁
塗師行盛佛師上總法橋朝宗幹縁比丘啓達

應安三年戊十二月三日敬記

當寺境内北の方ハ往古立川宮内大輔某の宅地たり
數年合戦の地也今猶林中の首塚と稱するものあるハ其謂なり
と云今も皇の跡と覺る地存し山中折とく矢の根の類の武器を
ありとつと又慶長の頃並川義賀などといふ人あり云宮内大輔
一族あり其豊太岡の朱章あるを以て當寺天叟宗祐和尚
御開國の砌寺領を乞奉り朱璽をもち又宮内大輔為討伐
佛閣を放火なりあひ静謐の後ハ修理せしむとある證據をある
す後住持覺榮宗理天叟の事事を愁訴せしむる所加増あること
旨被仰下とのとも遅くある所先榮和尚改衣の爲に京より
途中迂化せり其後久しく無住の寺となり朱章を欠と云然るハ
寛永の末住持大年といふ僧當寺に住せし故あり廣福寺
といふ小退去せしと什宝の古文書古器の類を悉く持て去れり

と云く今ハ寺の朱章を傳へ存せしもの
 日本年代配合鈔曰
 永正元年甲子九月廿五日立河原於山内顯定扇
 谷上杉朝義合戦朝義軍敗太田下野守為始多兵

南朝紀傳康正元年己亥正月廿日鎌倉成氏と房頭八定政上杉長尾景中と
 武州立川原合戦云
 小田原記云永正元年甲子九月廿七日駿河の今川氏輝并小田原の松田左衛門賴重を
 加りこれハ此勢を合せ扇谷の五郎賴良大將軍と
 布山内の管領上杉民部大輔可淳入道并當屋形憲房東八州の軍兵を
 催し押寄たりやうり夜ふ入られハ山内の加勢と越後の軍勢と合せられハ
 朝良ありあふかけとくらと河越の城は落延梅酸の湯をやむむ
 六面塔 卵塔の中あり高さ六尺五寸幅一尺五寸ありひま
 前面の二枚の石ハ一片ハ蓋石と臺石とを穿ちて立合せしものなり
 せり上の方ハ何れも宝蓋の二玉を彫刻し後面左右の四枚ハ四天王の像を刻
 ありす極めく妙作なり增長天の一片ハ號字等を刻せりやう文左のや
 延文六年辛丑七月六日 施財性了立 道圓刊

普濟寺境内六角古碑 高廿五尺三寸 中一尺四寸計
 按前より奉る所の南山大定禪師肖像座下の記文ハ性了の名あり六面
 塔の財主性了一なる一延文六年ハ康安と改元の年ハ應安三年に至る
 多のう小十年なり然れハ此人也

那羅延堅固



密迹金剛



增長天王



多聞天王



持國天王



廣目天王



當寺境内の地ハ多磨川の流小臨と勝景の地ナリ富士箱根秋
父郡の遠嶂等一望小遮り尤幽趣あり北の方ハ往古立川宮内大補
某々城營の旧址也其形勢を存懐旧の情を催さむ又小田
原の北条幕下なり五十嵐小文治といふ人も此地あり由
土人云傳へり前小願せし永祿三年の感状あり五十嵐市左衛門
といふ名を注し何れも其氏族の徒なるべし此故小今も此地に
五十嵐氏の人多し
被は五十嵐小文治ハ和田合戦ハ朝比奈
義秀討れし人なり是を混し土人
あやまり傳へる状

八幡宮 同所二町を隔て北の方あり神主宮崎氏奉祀を祭神
本多別命一座相傳建長四年癸子八月十五日勸請せりと云
本地佛ハ阿彌陀如来なり黄金仏法丈四寸八分あり弘法
大師の作なりといふ
天正年間野火の爲ふ神殿烏有とあり此時に至り亦失

立川
八幡宮
諏訪社
満願寺



あひく其所在を知らずなり 仍此地の領主立川宮内某の室
此を深く敷き思ひ新に弥陀像一軀を鑄く當社小収り
つり 疑ふ所は背面の文次は記せり 按は新像の膝は梅鉢の紋あり
其後宝永年間宮社を造立せんとせし時境内松の枯抹の根を
穿ちく鋤下小失ふ所の本地佛金像の弥陀如来を得たり
の足の跡も像の 又安永五年の夏賊の爲に奪はるゝといふとも靈威あり
以同年八月四日再當社小還座なり ありとありと

天正年間新造立所之本地佛之銘曰
武州多磨郡立河郷芝崎村八幡本地并與願主
立河宮内お孫る
于時天正拾四甲戌年三月十五日
本願大夫式部
大工推名土佐守

後光鏡之銘曰
武州多磨郡立河郷芝崎村八幡宮 鏡一面
爲家内安全
元文四年己未八月
五十嵐与八郎

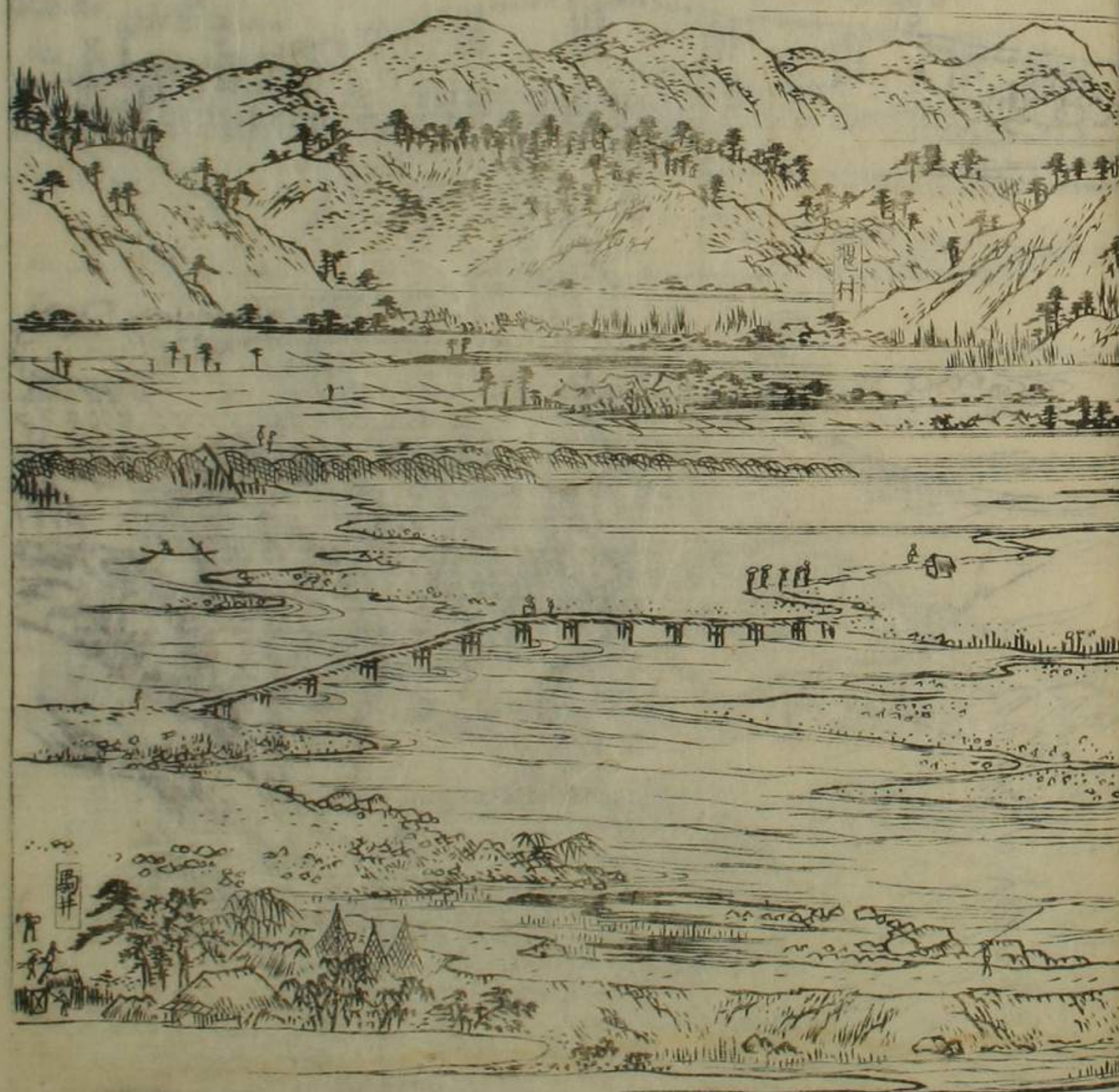
醫王山萬願寺 同所南の方四十歩計を隔り黄檗派の禪窟
やて鑲牛禪師居住の草庵の旧跡なりと後小一宇の蘭若と
なせしといふ本寺薬師如来八座像三尺計恵心僧都の作なり
殿士小日光月光十二神将等の像を安せり

額 本堂 向拜 岳悦山筆
山王 醫 額 堂内 東 瞻 左
院 光 院 高泉の
筆 筆

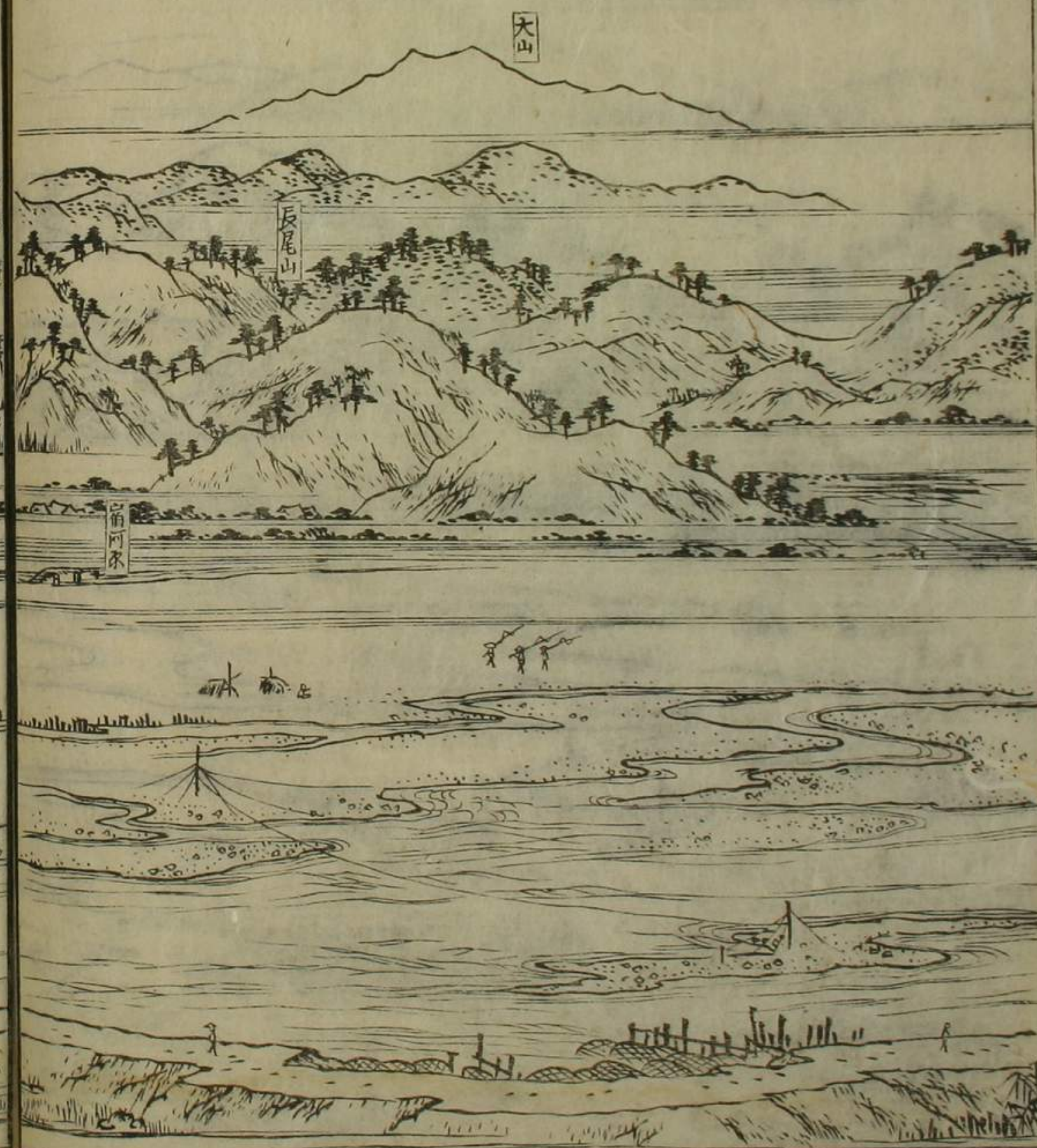
諏訪社八幡宮より六十歩斗東よりあり祭神建御名方命一座相
傳ふ弘仁二年辛卯七月廿一日は勸請せしといふ當社も宮崎
氏萬帶奉祀す

多磨川 當國第一の勝槩とを 和名類聚抄多磨川作り太婆と訓
篇多磨とす後世玉川と作るものハ山城長津ありハ紀伊近江陸奥等の國々あり
此川ハ武州の郡丹波郡の丹波村ハ源氏流る武蔵國田波河
いひくろなり日蓮上人注画讃大士臨終の時池上より移るハ条ハ武蔵國田波河

玉川ハ砂場廣
 豁中々其流れ
 一帯にあす多く
 雨後杯ハ渡り
 移標して定
 か一西北は秩父
 を以甲州の猪
 山を望み東南ハ
 堤塘の斜に連る
 を見る處を川
 の産とす夏秋の
 間多しあふ常
 小漢人絶也



其二

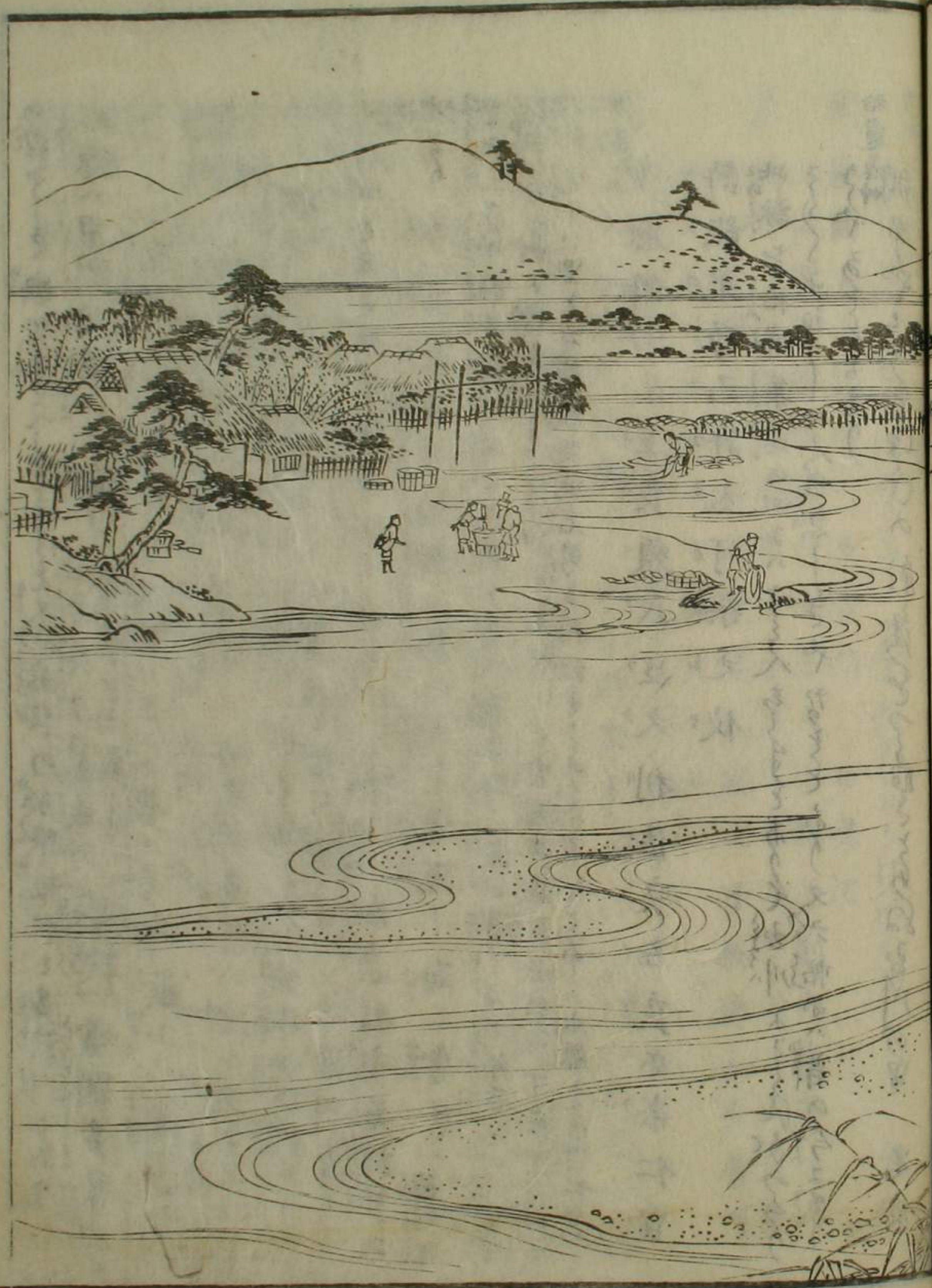


全玉川獵點



夫木
澤子内
親王
あふ食
新玉の
あふ食
玉川の
新玉を
あふ食
はとひ





拾遺愚草
 たけふり
 さす
 地祇
 新象
 法
 玉川の
 里
 定家

の辺や〜城をふく〜
水源ハ甲州丹波山ニ發シ田澤義章の武蔵野地名考云々當國多摩郡
入ノハ日原川も會流ス多摩郡日原川武蔵山武蔵山の麓を經ク
青梅の南ニ傍羽村四谷上水及ヒ福生拜島等の地ハ至ル又此地
又秋川の流も落會ヒ甲州境の地より經テ多摩郡伊奈村五日市
又石田と云ハ至ル浅井川も合又王子の山間和泉村中島村等の
地より末ハ多摩荏原橋樹三郡の間を東流シ海ニ會セリ橋樹郡
登戸二子小杉平河崎等の地ハ傍ヒ荏原郡ハ瀬田等ハ下丸子矢口八幡塚
羽田等の地ハ傍ヒ流ス甲州國境より當國多摩郡羽田村迄十餘里羽田村
六郷迄十六里と云武蔵野地名考云周流ス九里と云ハ水源ありの行程
万葉
多摩河泊ハ左良須氏豆久利佐良左良ハ奈仁曾
許能兒乃己許太可奈之伎
此詠を拾遺集意の四ハハ人あらずとあり又武川よこしハ昔の今ハ
さうやあ〜とあり

拾遺集
武蔵國風土記曰多磨郡多磨河
東鑑曰仁治二年辛丑十月二十二日丙子以武蔵
野可被開水田之由儀定訖就之可被懸上多磨河
此河ハ武蔵野の勝原中ノ日野津より以西ハ水石の美奇絶最
多一以東ハ平地と云々長流の徑ハ往々觀を改め亦勝景を
あ〜點を以テ此川の名産とす故ハ初夏の頃より晩秋の頃迄
都下の人遠きを厭フと云々来リ遊獵セリ

高幡山金剛寺高幡邑あり東鑑ハ高幡三郎と云ハ新義の真言宗
中ハ花洛三寶院跡ハ屬を大室より前の開創あり
其後弘法大師再興あり又慈覺大師再興すといハ本寺不動
明王ハ古佛古佛座像一丈餘あり炎光ハ布字十有九を刻ハ利益
脇士二童子化人の作なりといハ詩記云或時忽然と云ハ童子化人ハ不可

高幡
不動堂



なり予是を^{なり}作^{なり}と住持^{なり}持^{なり}諾^{なり}す依^{なり}僧^{なり}ハ一室^{なり}ハ入^{なり}と戸^{なり}を閉^{なり}敢^{なり}て戸外^{なり}ハ^{なり}なり
不^{なり}目^{なり}予^{なり}と造^{なり}功^{なり}畢^{なり}意^{なり}ハ異^{なり}僧^{なり}ハ去^{なり}て予^{なり}乃^{なり}カ^{なり}と云^{なり}予^{なり}室^{なり}の地^{なり}ハ稻^{なり}荷^{なり}と勸^{なり}請^{なり}す
古^{なり}鰐^{なり}口^{なり}一口^{なり}不動^{なり}堂^{なり}ハ懸^{なり}り徑^{なり}ハ一^{なり}尺^{なり}九^{なり}寸^{なり}文^{なり}字^{なり}
九十四^{なり}字^{なり}を刻^{なり}す銘^{なり}左^{なり}の^{なり}と

敬白 奉懸

右尋當寺者慈覺大師建立清和天皇御願所第二建
立斗山陽成天皇
彼時頼義朝臣自於登山奉崇八幡第三建立永意得
行靈兩檀
大檀那美作助真并記氏一宮田人鍋師源恒有
文永十年美酉五月廿日 銀念西守氏 鐵青蓮

服石 不動堂の後愛宕祠の傍にあり中六尺ちうち高サも五六尺ちうちあり
後諸の佛神ハ糸^{なり}宿^{なり}すとの^{なり}り

二王門 左右ハ金剛密額 高幡山 僧正泊如筆
迹の像を置り

惣門 二王門の額 高幡山 僧浩然筆

鼻井 庫裡の前左の方の山の裾にあり廣サ七尺斗の井泉と云相傳建武二年乙亥八月
四日の夜大風起り御堂を顛倒す故ハ平地ハ引下^{なり}と云^{なり}り
其首の堂^{なり}と云^{なり}り清泉涌出^{なり}す後鼻井と稱^{なり}し阿伽とす諸人寒熱の二病腫物眼疾
等其餘諸病^{なり}と云^{なり}り或ハ飲^{なり}或ハ其痛^{なり}所^{なり}ハ塗^{なり}りて平愈^{なり}せしとの^{なり}りなりと云^{なり}り
鎌倉大草依日亨應四年正月廿一日武州府中分倍川原ハ寄來^{なり}る

成氏五百餘騎^{なり}馳^{なり}出^{なり}短兵急^{なり}と云^{なり}り火出^{なり}る程ハ攻戰^{なり}ひ^{なり}る
間上杉方の先^{なり}もの大將^{なり}右馬助^{なり}入道憲顯^{なり}深^{なり}く負^{なり}く引^{なり}か^{なり}ひ^{なり}る

高旗寺^{なり}の自害^{なり}ハ鎌倉勢^{なり}ハ勝軍^{なり}ハある^{なり}と云^{なり}り石堂一色以下百五
十人討死^{なり}し戦^{なり}ひ^{なり}は倍河原^{なり}小陣^{なり}を取^{なり}云^{なり}り
縁起曰平山武者所季重幼^{なり}り當寺の不動尊を崇敬^{なり}一世ハ強
勇の名^{なり}を顯^{なり}せり治業^{なり}の頃平家追討^{なり}の時鎌倉の右大將家ハ

屬^{なり}義經^{なり}小隨^{なり}ひ^{なり}西國^{なり}小趣^{なり}き一の谷^{なり}ハ勇^{なり}を輝^{なり}し武名^{なり}世に
明^{なり}らけ^{なり}故^{なり}ハ後當山の頂^{なり}ハ此^{なり}ハ當の御堂^{なり}を建立^{なり}を然^{なり}ハ建
武二年乙亥八月四日暴風の災^{なり}ハ羅^{なり}々^{なり}殿堂破壊^{なり}を依^{なり}後平

地^{なり}ハ^{なり}其頃^{なり}の財主^{なり}ハ平助綱^{なり}ゆ^{なり}ハ大中臣女等^{なり}ありとの^{なり}り
尔來天下風水^{なり}或ハ疫癘^{なり}等の諸災^{なり}あ^{なり}んと云^{なり}り佛^{なり}骸^{なり}汗^{なり}を生^{なり}ず

其威靈^{なり}ハ拔^{なり}萃^{なり}を^{なり}つ^{なり}る

木切澤 金剛寺より半町^{なり}と云^{なり}り西の方^{なり}の谷^{なり}と云^{なり}り平季重^{なり}御堂建立^{なり}立

の時此所より堂材^{なり}を伐^{なり}出^{なり}しと云^{なり}り旧跡^{なり}なりと云^{なり}り

番近谷 同建立の番近の脈脈の地なりといひ

別旅明神 金剛寺より三町を東の方別旅邑より此地の産

土神とす則金剛寺奉祀の宮社より傳へ云金剛寺の本尊不動

明王の股士二童子を彫刻せ異僧との像を造る終る後立去

らんとす近里の道俗喜悅のあり其跡小墮ひく此地より来り

るふ件の異僧ハ忽よと人なりぬ貴賤奇異と一此地一社を

建立し別旅明神と称す地名も又別旅邑とのやを

平惟盛之墓 金剛寺より一町を西南平村 農民又右隣

ととる人の構の中あり青き一片の板石より高サ七尺五寸あり

中二尺程厚サ二寸あり上の方よりく字を彫下ふ文永八年辛未

中冬日とあり土人相傳へ平惟盛の碑なりと云往古此地ハ平助綱

と云武士住居平氏の遠裔なるハ惟盛の菩提を吊るる是成

造る 或ハ又助綱の墓なりとも云同南の方二町をわり山を

平村

平惟盛

古墳



文永八年辛未
中冬日

登る中腹又古碑あり剝落し讀へず只平の一字のみ
鮮明なり高サ六尺餘中二尺あり下ハ土中埋むる餘古石塔
二基何れも高サ四尺あり土人平山季重或又平氏の人の墳墓
と云傳へく分明ならず
此所ハ農民平氏某家累世の此地邑名を平
と稱し殊に平氏の人多し里正平氏の家ハ小田原北条氏直の下
文ありと云ふ

慈岳山松蓮壽昌禪寺 高幡より十二町東南の方百草邑にあり
昔ハ茂草ハ作るハ幡宮社地ハ源頼義義家兄弟奥州
征伐凱陣の時山号井井を改く増威とす云々 黄檗派の禪林に
して江戸白銀の瑞聖寺に属せり昔ハ天台宗あり増井山と号し
天平年間道璿の高弟釋道廣大勸進し始めて七堂全備の精舎を
創建す後康平五年伊豫守頼義奥州下向の時此地をよきり
あり松蓮寺に投宿しハ幡宮を再興あり朝敵追討の時頼
義又建久年間頼朝卿以来源家累代の祈願所と定められ建長

七年當寺の住持祐慶相州より琳長師を請し禪院を改むと
し慶長十五年松蓮寺方丈建營の棟札あり本尊釋迦佛座
像三尺斗あり脇士ハ阿難迦葉の立像三尺なり佛師藤村中圓
彫造中圓なりと云
中圓ハ華人やと肥前中興開山ハ慧極和尚と
号せり 享保六年辛丑 享保二年丁酉大久保加賀守忠英彦
夫人壽昌院殿慈岳元長尼中興開基と
元長尼ハ享保六年薨
て壽昌院慈岳と稱す常
三寶を恭敬し竟に當時を再興
せし當寺ハ四十五才の本像あり 本堂内陣の額松蓮壽昌禪寺の六
大字及び總門額慈岳山等ハ何れも中興開山明慧極の筆なり
本堂の前は揚々紫金光の額ハ隱元禪師の書なり
經筒三箇其銘文左の如し一ハ銅を以製す長九寸二分口
廣と四寸五分

長寛元年癸未十月十三日
工匠藤原守道



大勸進聖人僧辨豪
 如法書寫者僧玄久
 奉納妙法蓮華經
 僧定觀賢
 僧定阿久
 僧定尊
 僧辨意
 不承此北元

僧定尊
 僧辨意
 駐仕僧樂西

同一箇
 銅を以て製す長七寸五分口廣さ
 渡り四寸一分其文左の如し

大勸進

僧亮尊

大檀主藤原氏満貞判
 永萬元年九月十七日天

其蓋裏曰

大勸進所百草村

松連寺

同一箇
 金銅を以て製す長五寸口廣さ
 三寸一分其文左の如し

美 鈎命 祈

日本幕下

建久四年八月
 一宮別當
 松連寺修之

八幡宮本地佛阿弥陀如来像金銅一尺四寸あり土中出现の物に
 佛鉢の脊に鐫所の銘文あり左の如し

敬白治磨金銅影像法体
 為皇滿安日本主君當
 悉願成就乃師長父母平
 同共往生成乃至法界天
 大歲庚戌孟夏之富
 日主佛子慶祐敬白
 願主佛子慶祐敬白
 二年二月三日の条下は武蔵國真慈悲寺ハ所祈禱の灵場なり然りと之

ともてて莊園寺なりと云ふは、供具の備なく僧ハ衣鉢の貯け失ふ
爰に僧あり今日教上りて當寺より一僧を安置し破壊を修理せしむる旨
申請の向院主職は補せられしなり又同書建久三年五月八日の條下
法皇四十九日の神代事と南無堂は於て修せしむるに百僧供あり僧衆ハ真慈
悲寺より三〇とあり又同書治承五年四月廿日の條下小幡田三郎交茂
摩那内吉富神宮連光寺等の地を自の所領に譲りしに於て其の田畠を
吉富ハ此田なりと云ふは、其の地を真慈悲寺の所領に譲りしに於て其の田畠を
金壺は入る當社に納
僅は残るのみ

八幡社記曰建久四年鎌倉石大將家法華經を書寫し金壺は入る當社に納
其書寫せる所の竹紙法華經の文字多くハ朽敗し金壺は入る當社に納
僅は残るのみ

升井 常盤の山麓にあり寺中
八國見 本堂の後の山の上あり此所の登れハ八箇國の

二王塚 松蓮寺より東南五丁を隔て此所の内ハ高き所ハ松樹十
のあり此地ハ松蓮寺の地なり又此地ハ松蓮寺の地なり又此地ハ松蓮寺の地なり

松蓮寺より西の方山の中腹にあり則松蓮寺奉祀の
百草八幡宮 松蓮寺より西の方山の中腹にあり則松蓮寺奉祀の

宮より八月十五日を以て祭辰とす本社向拜の額八幡宮三
字ハ梅小路大納言定福卿の筆なり寺僧曰正殿ハ安置せる所の

神跡ハ八幡宮神宮王仁津戸明神武内大臣義家公等の木像
なりと云相傳東平五年源賴義義家兩公奥州の夷賊征伐の時
山城國男山正八幡宮の社檀の土を穿ちて石瓶ハ盛來る一字の
社を造営し此地ハ勸請なりなり願書等を収めし其後凶
徒悉く平け凱哥の時再此地に至りし金銅の觀世音の像
をも安置し永く祭祀を不朽は傳へんとし此觀音の像ハ松蓮寺の
石の祭田を寄附し且兩將軍の隨兵等も各軍功を祈り帶りて此の
刀杖を収め神德を謝し永く鎌倉頼朝卿當社の神を崇敬し
あひ建久四年法華經を書寫し金壺は入る奉納ありしとも
星霜を経る件の宝器散失せしと云徳年間二王塚の地を穿て
再ハ是を得しと云寺僧云當社境内の樹木枯る後ハ悉く
奥州の方へ向て倒るる昔より今に至るまであり是當社に
一奇変なりと云

一宮大明神社 百草八幡宮より十五六町北の方多麻川の南岸一宮
 村あり 六所宮あり 西南 祠官新田氏大田氏両家より奉祀を祭
 神ハ天下春命なり 後瀬織津比咩及ひ稻倉魂大神を合祭一々
 三神一社三扉とす 祭神今ハ小野 舊事本記ニ饒速日命 地神ニ代天
 此葦原の中津國ニ降臨し 時輔佐とて隨駕し 一々
 三十二神の其一神ゆゑ 即三十二國ニ分降あり 時信濃國ハ
 天表春命武藏國へハ天下春命降臨なり 一々ハ國を司き

と云ふ事なり
 社司相傳神代の昔當社下春命此地ハ止まり 或ハ又國の祖の神
 後ハ國の神なり 社司相傳神代の昔當社下春命此地ハ止まり 或ハ又國の祖の神
 命小野宮村ハ野神社ニ述座あり 倉稻魂命を配祀ハ 小野神社三神と云ふハ
 時世詳なり 後一宮ハ國の祖神ハ野宮ハ同郡の神社あり 一々ハ國造崇徳あり 倉稻
 魂命と共ニ合せ 再ハ六所の宮の相殿ハ 一々ハ國造崇徳あり 倉稻
 三所の神輿と供奉し あり 又毎歲五月五日六所宮大祭の辰當社の祠官用中ハ至一宮ハ野
 又供奉し 六所宮ハ至一宮ハ野

一宮大明神社



按、當社一宮のより旧史、所見、なりとも、既に地名を一宮と号、祠を一宮と
稱し、同國の祖神、第一鎮座なり、一宮と稱し、一宮と稱し、一宮と稱し、
山田三郎重成、平太公、所領、自の所領、注、如、東鑑、治承五年四月二十日、
吉富、一宮、別當、松連寺、の地名、を載せ、百草村、松連寺、所藏、の建久四年の、
一、次、又、高幡村、金剛寺、の銘、あり、時、建久の、む、松連寺、當社の、別當、
一宮、と、一宮、の地名、往、見、あり、
一、本、搜、一宮、より、南、の方、半町、を、隔、て、耕田、の中、に、あり、樹、の本、に
注連、を、繞、らせり、土、入、百草、八幡宮、の一鳥居、の、旧跡、なり、と、云、
八十町、と、
八幡宮、へ、至、間、

横溝八郎墳墓 小山田田関の地より一町あり西南道より右の方の畑の
中より塚上松槻等の老樹繁茂せり太平記云慶二年五月十六日
新田左中将義貞公武州分倍河原へ押寄るとい条下より四郎左近矣
入道相模入道の舎衆大勢なりといとも三浦一時の謀み破られて落行
勢ハ散る小鎌倉をとりて引退く討る者ハ數を不知大将左近入道ハ
関戸迎へて已に討れぬく見えんと横溝八郎踏止りて近付敵二ト

三騎時の間ハ射落し主後三騎討死を安保入道道堪父子三人
相隨ハ兵百餘人同枕ハ討死を其外譜代奉公の良後一言芳恩ハ
軍勢共三百餘人引返し討死し間ハ大将四郎左近入道ハ身
恙なく山内迄引れり安保入道父子の墓も此近きあり
構の中ハ古墳あり上ハ樞の古樹茂りありそれとも何人の墓の印あり
あつて相澤氏の説ハ安保入道の墳墓あると云ふも今は是非を定むべし
小山田田関址 今関戸と稱せり則これなり或人云此地熊野社邊
旧址なりと云按此地ハ天守臺と云ふ所なり此頂より眺望せむハ多麻川の
眼下ハ玉川の流を平臨し又遙ハ上下野州近一室ハ入る多麻川の
南岸ハより古府中より帝都及ハ鎌倉への街道あり東奥
北越の二道共此地を往還せむハなり
あり一ハ今ハ邑名ハの残る此所より二里を南の方ハ小山
田村と稱せり
夫本抄
六番番合
東鑑曰 治承五年 四月廿日 小山田三郎
或為世
顯昭

小山田田関
 関戸惣圖



六百番奇合
 阿のり
 苗代
 川とめく
 とり
 山の
 頭昭



重成聊背御意之聞成怖畏筆居是以武藏國多學
 郡内吉富并一宮蓮光寺等注如所領之內去年東
 國御家人安緒本領之時同賜御下文訖而為平太
 弘貞領所之旨捧申狀之間弘明之處無相違仍被
 付弘貞也云云
 尚書曰建曆三年十月十八日以宗監考
 尚為武藏國新開實檢被遺圖書允清定奉行云云
 同
 按東鑑載武藏國新開實檢被遺圖書允清定奉行云云
 成顯其一人武藏國新開實檢被遺圖書允清定奉行云云
 金井大官寺鶴間大谷廣勝寺小田三郎直谷
 善三郎小田寺鶴間大谷廣勝寺小田三郎直谷
 田庄の廣勝寺鶴間大谷廣勝寺小田三郎直谷
 家古文書を蔵す武藏國新開實檢被遺圖書允清定奉行云云
 の證狀なり二關戸中河原の内正成寺有山源右衛門
 芝原田庄の廣勝寺鶴間大谷廣勝寺小田三郎直谷
 又關戸市の定日あり武藏國新開實檢被遺圖書允清定奉行云云
 關錢五貫文有山源右衛門の證文なり

其地圖を依加るゝの事い少も私物に筋目
 自標各軍屋に付るゝの事い少も私物に筋目

子九月廿三日

憲秀 表押

有山源右衛門の

此地ハ昔鎌倉時世關を居られゝ旧跡やゝ建久の頃ハ鎌倉の
 右大將家浅間三原及ハ入間野等へ所符其餘陸奥上毛信濃越
 後等へ軍を發しあゝ時ハ必しも關戸口の大將を定られゝ諸
 書ハ我々も太平記ハ正慶二年合戰の条下ハ義貞教箇度の戰
 ひハ打勝多しぬと聞えゝハ東ハ箇國の武士とも順付り雲霞の
 如く關戸ハ一日逗留ありゝ軍勢の著到を看らしゝるハ六十萬七
 千餘騎とを注るゝとありゝ此所の事なり
 延命寺 壽德寺より三四町南の方道より右側より地蔵院と号
 時宗より相州藤澤の清淨光寺ハ属を本寺地蔵寺ハ立像一尺
 五寸とありゝ作者詳なりハ開山を普國上人と号す門は入口



関戸
天守臺

右の方畑の傍に榛木の老樹を以印とせし古塚あり正慶二年

武蔵野合戦は討死せし四百餘人の墓なりとせし

城山 延命寺の後の山嶺を以土中稀に古瓦を得るありとせし

其城主及び時世等詳ならず土人云昔小田原北条家の幕下関戸

駿河守とせし人云ありとも又永祿の頃佐伯市助道永といふ

武士小田原の北条家は仕へ此地に住せしとせし

明徳元年庚午念阿護法入道此地に一寺を創建ありて吉祥山

壽徳寺と云禪院を再興せし此寺は関戸又口道道永自ら中興開基と

なり日舜宗惠大和尚を請へて中興開基とせし

年己巳二月三日陸奥小藏死す道永の子孫三河守道也和泉守道安同集人

死後振興する人等皆此地に住せし民風は下りてなり

天守臺 同山嶺西の方より城山の半腹より曲折して山頂なる

まて老松繁茂す此所より四望せし尤絶景なり

近頃山頂は金毘羅

舊切坂 下関戸の宿の南の坂を云坂の上を古市場と唱ふ昔商戸

驛舎あり此地なり天正己未此地の古道廢して今ハ名のみとな

しとせしと府中より横切て相州矢倉澤大磯等への官用の次

場なり 今相州大山石尊富士詣杯相傳正平七年壬二月八日武蔵野

合戦の時新田義貞公脇屋義治公等は二百餘騎は討死され河方の

勢も散るは行方なきなり一ハ迎ひ討死せし余あるハ鎌倉へ

打入り足利左馬頭基氏は逢ふ命を失はせと夜半過る頃関戸を

過るひるふ石堂入道三浦介等の五六千騎の勢は出逢ふハ神

奈川を徑鎌倉へ打入勝利を得る頃此地より馬の香をとり

てたせあり打あを依る名とすとのみ

赤坂臺 関戸より十六七町東の方蓮光寺村を横きりて赤坂と号

く坂を登れハ赤坂臺なり一里半を徑て河原谷と云地あり

平臺 赤坂臺の東の嶺を以此所は三圍とある老松一株あり

土人甚兵衛松と字を此地ハ矢の口ニ属す

騰雲山明覚寺

矢の口村街道より南の横より渡一場の南拾五町

あまの河と臨海派の禪林や鎌倉建長寺は属を本寺の釋迦如来

唐佛や座像八寸をかり何と當寺ハ往古足利義晴公建立なり

佛刹や其後廢寺となりと慶長年間加藤太郎左衛門再興

一と菩提寺となりと云中奥閑基ハ揚雲和尚中興す

長坂血鎗九郎陣中守護の為鎧の中小籠なりと今ハ一尺斗の

觀音を安置せり立像三寸をかり弘法大師の作なり今ハ一尺斗の

正觀音を彫造しと中興中ハ秘安せり

小澤小太郎居宅旧地 當寺境内の辺を云今猶馬場の旧跡なりと

称する地あり又當寺の前ハ小高き岡ありと藏地下より号く平頃

兵根を収める倉の跡なりと云 此の小澤の城址の条下ハ小澤某の名を

州原山威光寺 同所明覚寺より道を隔て一丁斗向ハ側二丁斗左へ

入るなり新義真言宗や坂瀨高勝寺ハ属を本寺ハ大日如来

座像三尺をかり當寺ハ穴澤天神の別當なり 天明年間火災

遷く焼亡し 罹りて願堂僧坊

東鑑曰 治承四年庚子十一月十五日 祈禱所院主僧

武藏國威光寺僧坊者依爲源家被代御祈禱所院主僧

僧曰 相承之僧坊寺領如元被奉免之云云

武藏國威光寺二年院主長爲四月被奉免之云云

亡畢有御威光寺院主長爲四月被奉免之云云

領之由有御威光寺院主長爲四月被奉免之云云

書曰 文治元年九月所處給御下所祈申也下畧

小止其郎有治元年九月所處給御下所祈申也下畧

同 所可止其郎有治元年九月所處給御下所祈申也下畧

廣藤判官上子妨高元年九月所處給御下所祈申也下畧

武藏國威光寺二年院主長爲四月被奉免之云云

去月廿六日率五十五餘人惡黨乱入寺領及前田狼

入道増西五十餘人惡黨乱入寺領及前田狼

あり相江入道ハ多郡郡江郡の主なり今同郡佐郷村ハ其旧館の地と

國安宮
威光寺



威光寺



此の地より程遠く東鑑本は拍子作の誤なり
 江戸の雅司其間七里隔つて一里も當寺ハ天明年間の大災火災に記され
 たりと云ふ古を考へ合ふとさたよりなる一箇多訂正と云ふのと

國安明神祠 威光寺の南五十歩を隔て同一側左の小道を三十歩
 斗入るあり 神主山本氏奉祀す 神躰ハ左のめきとのふく世云所の
 鑄形の神像なり 相傳ふ往古小澤左衛門尉國高と云ふ人此地を
 領す國高此地は道遙あり一頃松樹の下は白髪のお翁現る
 して曰く我ハ大國主神なり此地は崇祀らハ万民國安かへと云
 國高奇異の思ひを宮居を営んでたふ國安明神と崇め
 祭社領の地八百五十坪を寄附あり武運長久なるを祈
 念すとのふ

國安神像

銅物 長六寸四分 厚一寸 天蓋蓋あり 付あり 一と覺き 蓋あり 下の方あり

花瓶のめきとのあり
 上の方より口あり 神躰を
 僧形あり 宝珠と
 劍と持し 形あり



本願主
 山本權律師私信
 應安六年辰八月十日

穴澤天神社 谷口邑威光寺より東北の方三町を隔て同一往還

右の方小道を入てあり社ハ山の中腹あり此邊を小澤原と唱今
 祭神詳ならず後世菅神を合祭せり祭礼ハ七月廿五日なり又同日
 神樂を修行し九月廿五日ハ獅子舞を興行也別當ハ真言宗はて
 威光寺と号す

延喜式神名帳曰 武藏國 多磨郡
 穴澤天神社云



武蔵國風土記殘編曰 武蔵國 多磨郡
穴澤天神 圭田三十六束三毛田 孝安天皇
四年壬辰三月所祭必名彦神也云云

當社の麓を淵水流とく多麻川は合せ其流を隔て山岨一の
巖窟あり故に穴澤の名あり昔の巖洞は崩れたり今新に堀
穿て同穴あり洞口一ヤク内ハ二に分てあり

小澤城址 谷口天神の山續浅間山の西は並へ東鑑は元久二年己丑六月

廿三日稻毛入道大河戸三郎為誅せし子息小澤次郎重政ハ宇佐美與二

是を誅せし又同書同年十月三日小澤左近將監信重綾小路三位師季此

息女を相伴く京都より泰着を行先を以支の由を尼御臺に啓せ下畧又

同月四日夜は入綾小路の姫君尼御臺所の法亭より泰ら御猶子とて是後

武蔵國小澤郷 郷領あり知れせしへきの由何れとあり鎌倉大草

紙文明九年長尾四郎左衛門尉景春山内上杉の家勢職を秉ら

ざるを憤り逆心を企頭定を亡さんとして武州相州の内一味同心に

兵を催し上杉家を襲ふとて条下は金子掃部助ハ小澤と云

城は指籠る間大田左衛門入道下知とく扇谷より勢を遣し同

三月十八日溝呂木の城を攻落を同日は磯の要害を責ら一日防

戦ひ夜は入れは越後五郎四郎をかきとて城を渡り降参を奉り

小澤城へ押寄せし城難所あり落くこと 中景春一味の宰相

寺なりひふ吉里宮内左衛門尉以下小澤の城の後詰として横山より

打出當國府中陣を取畧 同年四月十八日金子掃部助ハ龜とる

小澤の城も責落せしなり

向の岡 今向岡と称する地ハ多麻川を北に帶て西ハ関戸より發する

東ハ末長は終るものなり是なり連岡の長九六里ありなり

或ハ云今向の岡と称する連岡向の岡ハある武蔵國風土記殘篇より

て考ふと多磨郡北の向の岡は限るとあるを以て此地ハ

あつて一と然は同郡狹山ハ南北東西五里尾より八國山はより東

西二十里の連岡なり四方共武蔵國野より何れの方より岡は相對する

故は向の岡の名ありといひ候て今向の岡と稱する地ハ都筑と一と佳

なりんとあるや否やあれとも甚く疑をこふ事なるなり

武蔵國風土記殘編曰
多磨郡東限草窪岡西限金川南限華田浦北限向
岡云云

新抄撰

續古今

玉葉

同

夫木

四家集

竹林名所考

夕日

都筑

横山

案内山

坂東路

武蔵野の岡は多磨郡に在りては往古より名を知られしなり

新抄撰

玉葉

同

夫木

四家集

竹林名所考

夕日

都筑の岳

横山

案内山

坂東路

青沼明神

大神二神

八月十五日

仙谷山

菅村

創

より

本堂

鐘

阿弥陀堂

大黒

と

同所長沼村八王子通道の傍にあり祭神大田命猿田彦

大神二神なり勸請の初をあるは社の司福島氏奉祀を祭禮と

八月十五日なり

仙谷山壽福禪寺

菅村にあり

創なり

より

本堂

鐘

阿弥陀堂

大黒

と

指月

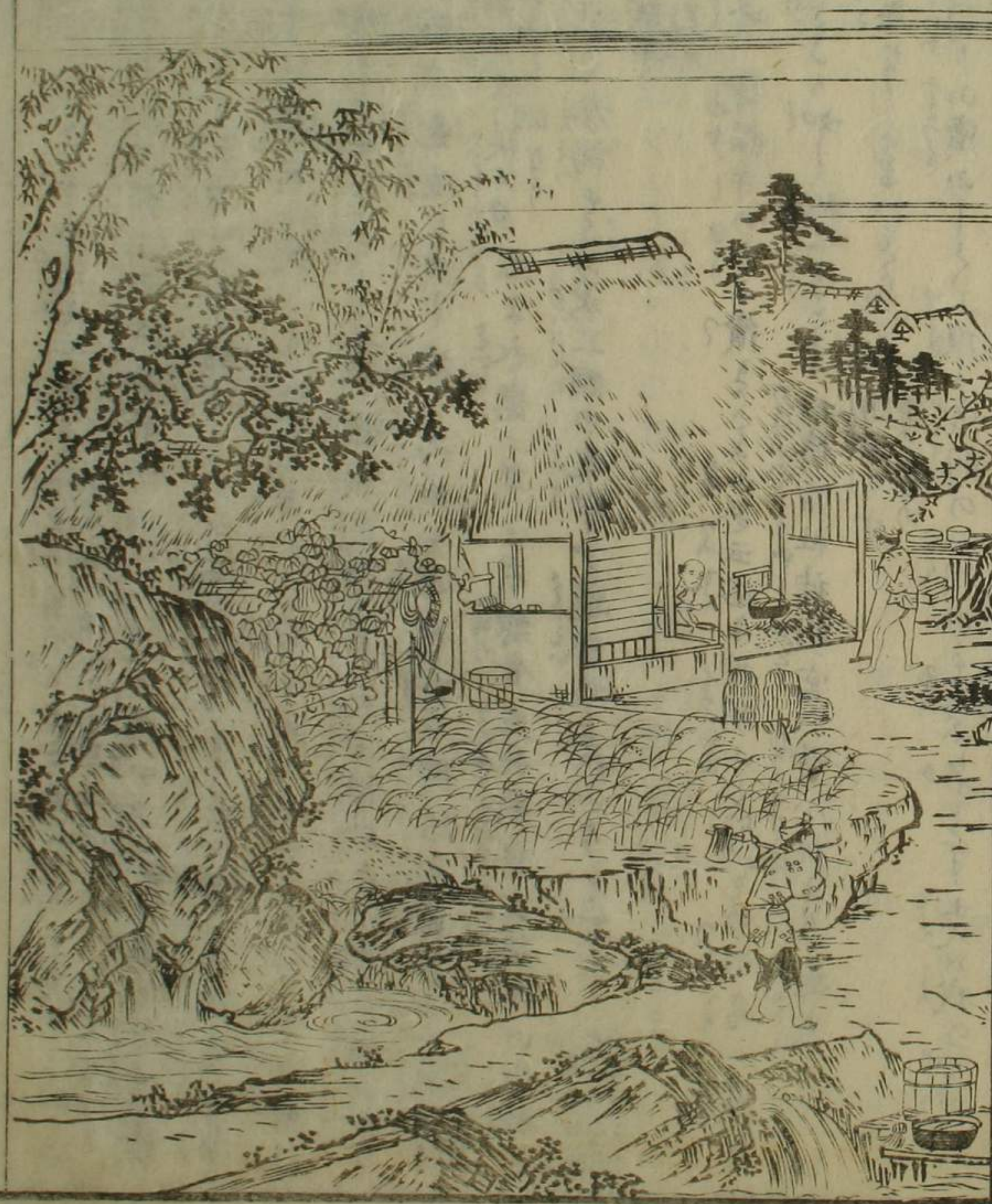
鎮守宮

と

もろ
福寺



吐玉水



標し以て寺の速大を祝す後建長曜侍者虚空藏經一軸を贈るのみ
康平年間八幡太郎義家奥州征伐出陣の時中路に宿を其頂當
寺本より開運を祈る後果して感遇を獲るも昔小澤小太郎重政毎
晨市を像前より旋々現當の善因を修す然る兵災に遭く寺宇既に
敗壞せり年久し愛小鎌倉建長寺の大安禪師大方慶和尚此地に
卓錫し荒廢を興し始々禪風を振ふなり僧俗雲集或云建長寺八十世法慶和尚是なり大方慶然る永徳二年壬戌鎌倉左兵衛督氏満師の徳振を
慕ひて参詣するの次三個の殿宇を造営せられりとあり
三個人所僧大會堂善應

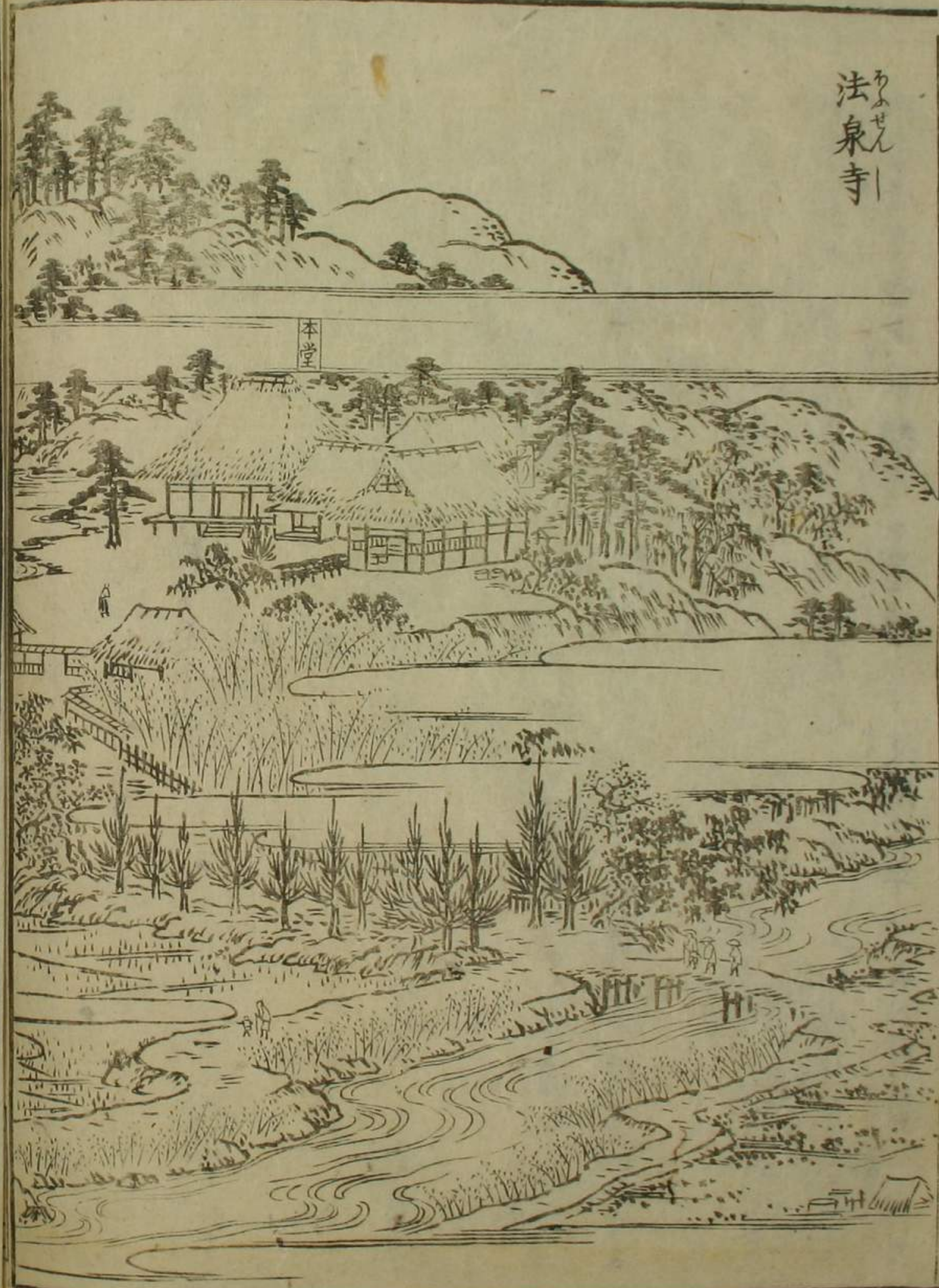
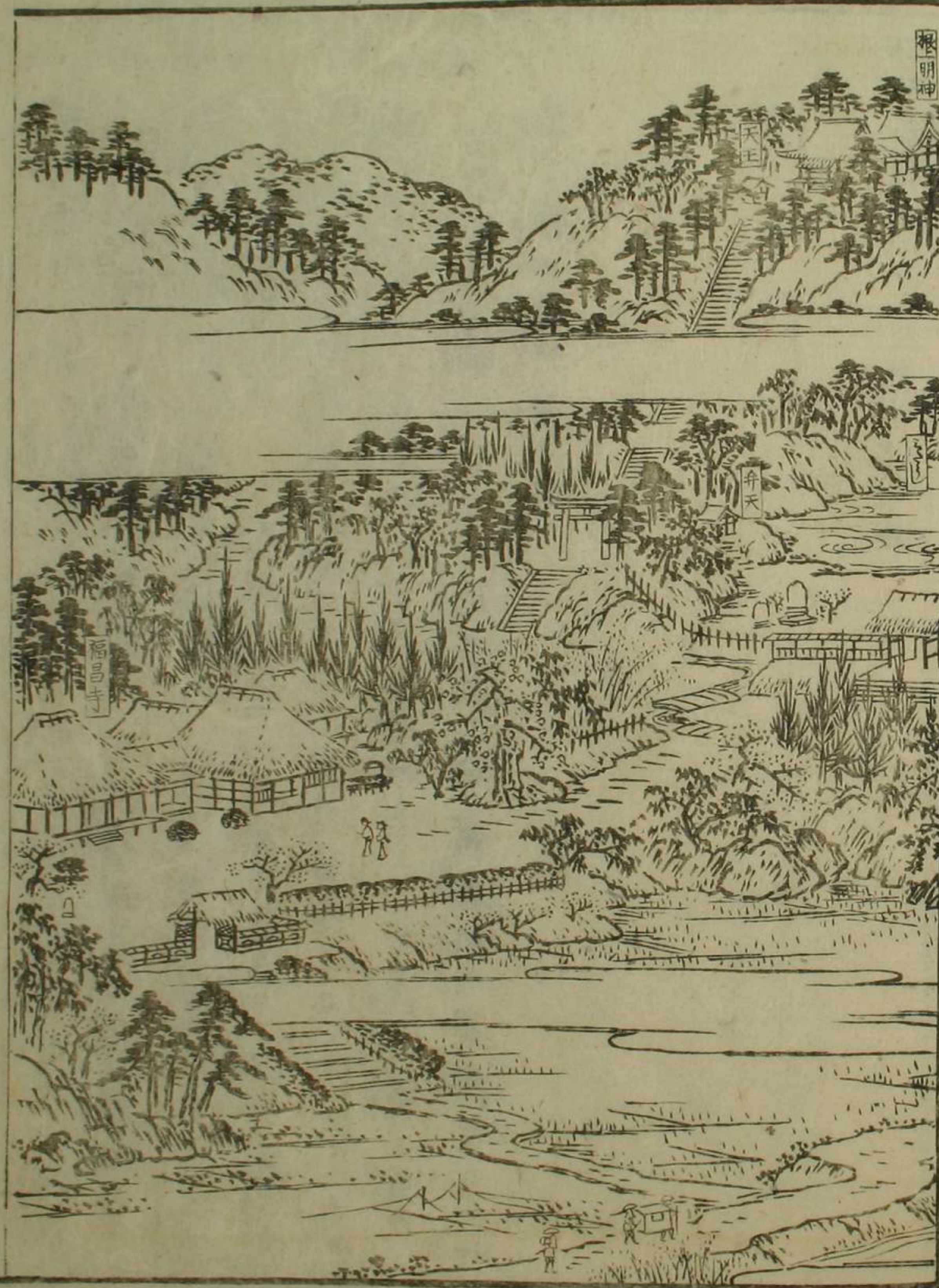
展翼峰 壽福寺の左に續く山を云俗に神明山といふその形鳥の翼成
展く如く故に号す相傳當社神明宮ハ昔小机より飛来するに
鎮座なりと云壽福寺十
浅間山同一山續く山頂は浅間の小祠あり名とす土人ハ城の浅間山

と云是も壽福寺十境の一なりと光照崖と号す荆棘を多き小
篠を上げ登り數十歩絶頂に至り崖は臨みて眺望せれば眼界
蒼茫と山水の美筆端に尽しかる浅間の祠あり城跡と稱する下り小澤の城跡と稱する

吐玉泉 壽福寺より後の方の谷を隔く西の山際農氏の地あり水源
白砂を吹出せり小号とす昔ハ小澤の白清水といふ是も壽福寺
十境の一なり

大谷山法泉寺 吉祥院と号す壽福寺の南十町を隔て菅村の
内府中道の右にあり縮毛領中て天台宗なり深大寺村の深大寺は
属せり阿弥陀如来を祀るなり

薬師堂 寺より西の傍一軒半あり毎歳八月十二日獅子舞あり
本より薬師如来の像ハ慈覚大師彫造なりと相傳左馬頭義朝の
御臺所常盤御前護持の靈像なり文治三年丁未八月叡山の文



法泉寺
ほうせん

顯阿闍梨此地の領主稻毛三郎重成と共に謀り當山を闢き
一字の梵刹とて此靈像を安置せし後平政子卿前崇敬を
其頃賴朝卿より香花の資料とて當國高麗郡の地を寄
附せし建久八年丁巳賴朝卿當寺へ詣り又康元二年丙辰
五月賴嗣公賴經公の菩提の御堂再興なり又より大伽
藍となりて正慶建武の兵亂に廢壞せしより後日貫又復さ
るなりとて鎧兜唐木小机等は二品ハ賴朝卿の寄附なりと云
傳々當寺の什室とす

江戸名所圖會天璣之卷畢

江戸名所圖繪全部廿卷目次

壹之卷三冊

日本橋本町通神田小川町飯田町兩國靈巖島八町堀築地
鐵炮洲芝口愛宕下西久保赤羽根三田魚籃白銀芝浦

出版

二之卷三冊

品川驛大井鈴ヶ森池上矢口大森蒲田八幡六郷川崎鶴見
生麥神奈川本牧程ヶ谷杉田金澤

發行

三之卷四冊

外櫻田霞關永田馬場平川溜池麻布廣尾青山目黒碑文谷北澤
世田ヶ谷澁谷四谷千駄ヶ谷代々木高井戸武藏野府中玉川向ヶ岡

四之卷三冊

市谷牛込小石川大窪柏木成子堀之内中野小金井築土高
田大塚雜司ヶ谷巢鴨板橋練馬大宮野火止

五之卷二冊

湯島上野日暮根津谷中三寄駒込王子川口豐島川

未春

六之卷二冊

淺草下谷根岸山谷橋場千住西新井

發行

七之卷三冊

深川本所龜戸押上柳島隅田川木下川松戸行德國府臺
八幡船橋

天保五年甲午孟春

日本橋通壹丁目
淺草茅町二丁目

須原屋茂兵衛
須原屋伊八

三都發

行書林

江戶神田通新石町	江戶南傳馬町壹丁目	江戶日本橋通四丁目	江戶日本橋通二丁目	江戶日本橋通三丁目	江戶芝神明前	江戶淺草新寺町	江戶神田鍛冶町二丁目	江戶兩國吉川町	大坂心齋橋筋安堂寺町	大坂心齋橋筋唐物町	京都寺町通松原下
須原屋源	須原屋文	須原屋佐	小日本橋通林新兵衛	山城屋佐兵衛	岡田屋嘉七	和泉屋庄次郎	北島順四郎	山田佐助	秋田屋太右衛門	河内屋太助	勝村治右衛門

